

はじめに

都心居住の現状と課題を踏まえ、持続的に都市の活力とモラルを生み出し支える、都心居住文化の創造について、大阪・上町台地一帯における胎動を追いながら、今後求められる取り組み方策を探っていききたいという意図で、本シリーズをスタートした。

前回、第一話では、大阪市の居住動向を、人口・住宅統計から簡単に概観し、その特徴と課題を大まかに捉え

紹介、筆者も一員が集まって動き始めた組織である。何よりも、大阪・上町台地から本質的な都市再生、都心居住文化創造の真価を問うていきたいとの思いが、原点にある。

地域と生活の関係問い直すムーブメントの背景には、高度経済成長期をピークに、極端に進行した都市の膨張と都心の空洞化、工業化の急激な進展等々、さらには家族のあり方やワークスタイルの変化、これらが相互に絡み合って引き起こした、地域社会と生活の乖離をめぐる諸々の問題が存在しているといってもいいだろう。

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

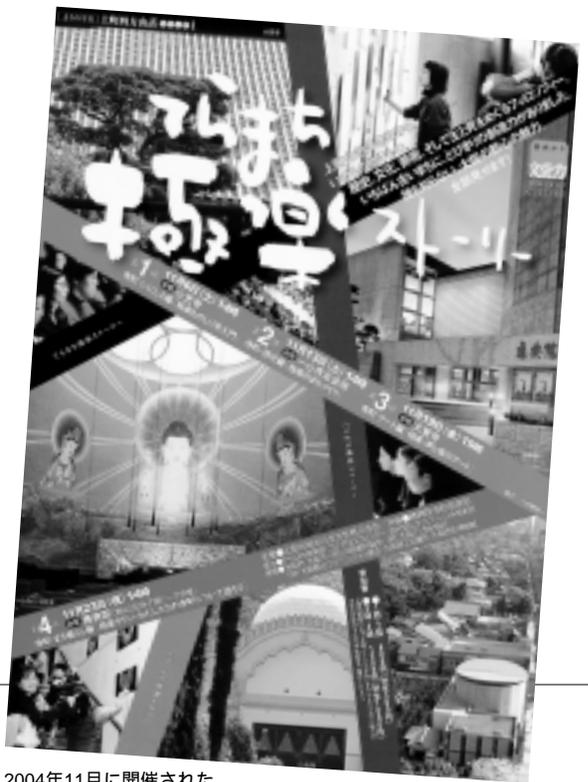
大阪・上町台地発  
都心居住文化の創造へ  
(第2話)

上町台地から、  
歴史・文化の連続性に  
向き合う意味とは

たうえで、課題解決に向けてある種の可能性を秘めているのではないかと思われる、上町台地からまちを考える「会」の誕生の経緯について、簡単に紹介した。

前回ふれたとおり、同会は、地域の歴史・文化と密接に関わりながら生まれてきた。市民の知ともいえるべき諸資源を、上町台地という独特の場所に立脚しながら結び合わせていくことで、より力ある知へと育てていくことができるのではないかとの思いを共有する、複数の活動団体・拠点地域の関係者や大学の研究者等(メンバーは前号で

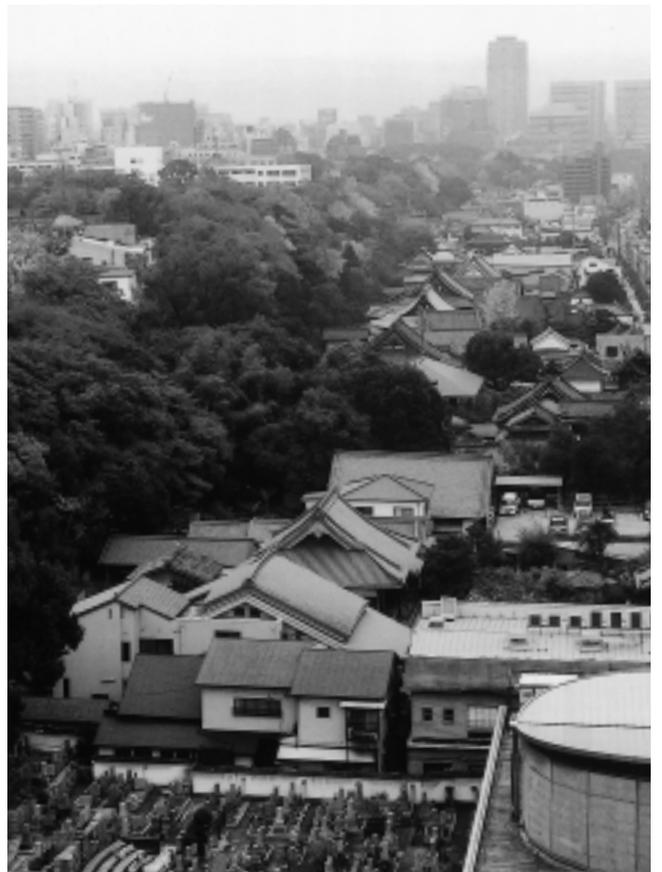
例えば、多世代間の価値観の共有やコミュニケーションの断絶、生命の連続性に関する感受性や想像力の欠如をはじめ、さまざまな生活上の亀裂があちこちで露になり、固有の場や存在に関わる意味の連続性を細かく断ち切ってしまった。結果、そこに生きるリアリティが疎外され、深刻なアイデンティティ・クライシスや孤立あるいは地域における問題解決力の衰退など、社会との関係不全を、個々人の中にも、地域の中にも、引き起こしているように思えてならない。



2004年11月に開催された  
「てらまち極楽ストーリー」のチラシ  
(主催：上町台地からまちを考える会、共催：應典院寺町倶楽部)

こうした関係不全を克服していく手がかり・足がかりとして期待されているのが、世代や立場を超えて多くの人々の多種多様な関わりを可能とする、受容力に富んだ自然の循環や、歴史・文化の連続性へのアクセスではないだろうか。ちなみに、ここでいう自然の循環とは都市でも感受できる身近な光や風や水や緑につながるものであり、歴史・文化とは当然ながら明るく都合のよい出来事ばかりでなく、苦しみや悲しみや痛みをともしなう出来事を含むものである。

さて、そこで連載第二回目の今回は、この秋、上町台地からまちを考える会が開催した、まちの学校・上町四方山話シリーズ「てらまち極楽ストーリー」で提起された論点を紹介しながら、これからの都心居住のあり姿を展望するうえで、歴史・文化の連続性に向き合う本質的な意味とは何であり、そこからいったい何が見えてくるのかを探っていききたい。



上町台地の崖線に沿って、  
斜面林を背後に並ぶ下寺町の景観

## 上町台地の原風景を抱く・寺町

前号でも簡単にふれたが、上町台地は古代大阪の水際線だった。西に広がる海を介して、東アジアを中心とする国際的なネットワークの拠点、政治・経済・文化の窓口として歴史上重要な役割を果たしてきた。この大阪湾上に延びる水際の地形の特性が、数々の文化資源を涵養してきた。台地に沿って、四天王寺や難波宮はもちろん、宗教・政治・文化等々多くの施設や遺構が点在するさま

は、水際が育む創造力の痕跡を示しているともいえる。海辺は長く人々の心の中で、生命の源、カオス、異界・常世としての海の入河口、境界として認識されてきた。富や豊饒を運び寄せる場であり、未知の文化を運び寄せる場であり、死と再生を巡る信仰や物語の舞台でもあつ

た。時が下り、水際線が遙かに遠ざかっていってまもなく、水際線特有のコスモロジを台地の懐深くに宿し、やがてこの地の一角に寺町が形成されていくのである。

鳴海邦碩氏・橋爪紳也氏編著、大阪の空間文化 商都のコスモロジ』（TBSブリタニカ、一九九〇年）で、高台の寺町」について執筆した山村康之氏は、寺町の履歴を4期に分けて次のように解説している。以下にその部分を引用する。

**第1期（古代） 四天王寺とその末寺の形成**

587年のこと、国家鎮護をねがう聖徳太子の手によって、仏教布教の活動の拠点であり、同時に軍事的な拠点でもあったといわれる四天王寺が開創された。その後、645年には、上町台地上の難波長柄豊崎宮に都が置かれ、四天王寺周辺でも、伽藍を中心として街が形成された。しかし、難波京が廃されたのち、都が京へ遷されたため、上町台地一帯は四天王寺やその末寺を残してすべて田園へと帰した。

**第2期（中世） 浄土思想の聖地へ**

中世において浄土思想が興隆し、夕陽丘は西方浄土を礼拝する宗教的聖地となり、皇族や公家がこの地をしばしば訪れている。また、聖徳太子信仰も盛んとなって、伶人町など四天王寺の門前が栄えたという。

**第3期（江戸時代初期） 寺町の建設**

大阪夏の陣の後、初代の大坂城主となった松平忠明は、秀吉の築いた大阪市街地の整理・再編事業を行った。この時、一向宗を除く市内の各寺院を天満、小橋、東西高津の各村に整理・統合し、寺町を建設した。これが今日夕陽丘の寺町の起こりとなっている。有事の際の軍事的利用が目的であるとか、将来

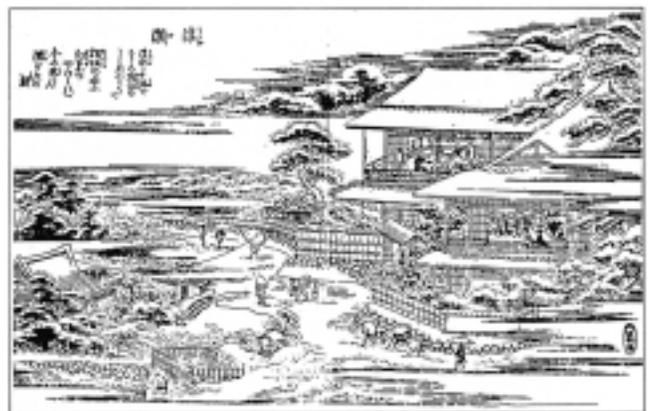
の大阪の市街地の拡張に支障がないように配慮したためなどといわれているが、この寺町の建設が、夕陽丘の今日の空間構成の基盤を形成したといえる。

**第4期（江戸時代中期以降） 名所性の付与**

江戸期もすむと、庶民文化の成熟につれて、寺社詣でや梅や桃、桜の花の名所として多くの人がびとが遊山に訪れるようになった。四天王寺の門前町や、愛染坂のあたりには遊郭・料亭などが立ち並び、夕陽丘一帯は大坂近郊の一大レジャー空間として賑わった。夕陽丘は、庶民にとっては社寺という宗教的異界性と、台地の上という空間的異界性を合わせ持つ地域であった。人びとは精進落としと称して、門前の異界に集まったのである。

その後、近代の初頭には近世同様都市の周縁部に位置していた寺町だが、やがて都市の膨張と震災及び震災復興の区画整理や谷町筋等の大規模な道路建設等とともに、まちは市街化の波に飲まれていく。

それでも、今なお寺々はその命脈を保ち、上町台地の崖際・崖下に並ぶ寺地が、崖際の開発の防波堤となり、斜面に息づく貴重な自然林を守ってきた。と同時に、居並ぶビルやマンションやホテルや風俗店とともに、寺々の翼が連なる特異な景観をも生み出している。その混沌とした寺町で、二世紀初頭の今、開催されたのが、まちの学校・上町四方山話シリーズ」てらまち極楽ストーリー」というわけである。



上町台地の眺望を愛でて立ち並んだ料亭の代表格「浮瀨（うかむせ）」には、多くの文人たちが集った（『摂津名所図絵』から）



かつて料亭や泊茶屋が並んだ界隈には、今ファッションホテルやマンションが並ぶ

## 寺町に生きる当事者からの発信

このイベントは、上町台地からまちを考える会・代表理事の秋田光彦氏(大蓮寺住職・應典院主幹)が企画。同会主催・應典院寺町倶楽部が共催で、運営に関しては應典院スタッフ及び各回に登場いただいた寺町関係者の全面的な協力を得て実現したものである。四回連続の構成で、天王寺区下寺町の心光寺・大覚寺・應典院とその南(天王寺区逢坂)に位置する一心寺を舞台に、寺町ならではの趣向に富んだプログラムが展開された。

第1話(11月6日)は、寺町・いにしえ編「極楽ものしり学入門」。寺町の最長老(大正二年生まれ)の心光寺住職・山名雄光氏が、先代住職が自ら設計・施工した、当時としては極めて珍しいドーム型の洋風本堂(国の登録文化財)の見所や建築秘話、大阪市指定重要文化財の十一面観音の紹介はもちろんのこと、歴史にまつわる豊富な知見と見聞をもとに、熊野詣の参詣道としての上町台地の意味を紐解き、寺町の来歴、夕陽丘や台地の上下を結ぶ天王寺七坂の魅力、そこに生まれた料亭の数々と文人墨客や物語の足跡まで、文字通り時空を超えた語りを繰り広げた。

第2話(11月13日)は、寺町・現代編「極楽のまちづくりに」。一心寺長老で建築家である高口恭行氏が、同氏を中心に作成・公表した「茶臼山・夕陽丘プロムナード構想」(一九九七年に提言として発表)をベースに、世界に稀なる寺町のアイデンティティ、沈む夕陽に極楽浄土を想念する、日想観に代表される信仰の地としての系譜を物語った。そして、その価値を再評価し活かしていく必要性を、歴史の壮大なパースペクティブの中で説き、身近な街路景観の改善から歴史の散歩道センター計画まで、具体的



「てらまち極楽ストーリー」第1話の会場となった心光寺。先代の住職自らが設計・施工した本堂(国の登録文化財)



天王寺七坂のひとつ「口縄坂」。織田作之助の『木の都』でも、懐かしく回想される原風景のひとつ

な提案の数々が紹介された。また、同寺の三千仏堂地下に開設された一心寺シアター「倶楽」(劇場)の由来や、なにわ人形芝居フェスティバルの開催など、寺町に新たな文化ムーブメントを巻き起こしてきた所以、寺町ならではのコミュニケーション・デイベロップメントに対する熱い思いが語られた。

第3話(11月19日)は、寺町・アート編「極楽・声と音のアート」。下寺町の若手僧侶の会「三帰会」の面々によって、江戸時代文化年間の名建築である大覚寺本堂で、多彩な楽器や経文、色とりどりの法衣に彩られる荘厳な仏教儀式が披露された。詩人・上田假奈代氏による詩の朗

読と読経のコラボレーションは、まちの遠い記憶の裂け目に染み入るような音色を醸し出した。都心の喧騒の只中、土塀と門の向こうで静かに受け継がれてきた独特の宗教文化とその担い手たる若き僧侶たち。市民との新鮮な出会いの場となった。

そして、最終回の第4話(11月23日)は、寺町・まち暮らし編「極楽タウン私たちの寺町について語る」。「劇場型寺院・應徳院の本堂ホールを会場に、地理学を専門とする加藤政洋氏(流通科学大学助教授)が「死者とともにある街」下寺町の空間誌」をテーマに、下寺町のコスモロジーを読み解き、未来への示唆へと言及した。これを受けて、後半のトークセッションは、「私たちの寺町について語る」という設定で、上町台地からまちを考える会の理事、渥美公秀氏(大阪大学大学院助教授)・宋悟氏(コリアNGOセンター代表理事)・秋田光彦氏(大蓮寺住職・應徳院主幹)・高田光雄氏(京都大学大学院教授)が加わり、同会の事務局長、山口洋典氏(大学コンソーシアム京都研究主幹)をコーディネーターに、下寺町という固有の場所と歴史に、異なる背景を持つ他者たちがどう関わり得るのか、そこにどのような意味があり、何が展望できるのか、加藤氏の言説に触発されて、刺激的な議論が展開された。

### 寺町から都市へ投げかける視線

さて、核心に入るにあたって、同イベント開催の動機について、企画者の秋田氏の言を紹介しておこう(同イベントのプログラムに秋田氏が執筆した文章を以下に引用)。

上町台地は言うまでもなく、大阪の都心における歴史・文化資源の舞台です。同時に人々の生活や暮らしが混ざり合い、大阪では珍しい文化的居住空間

としても親しまれてきました。

しかし、ただ歴史・伝統が都心にあるからといって、その価値が十分に人々に理解されていなければ、高層マンションの売り文句程度のお飾りに過ぎません。私たちはこれまで歴史や伝統を保護するばかりで、それが都心生活・居住について、どういう意味を持つものなのか、積極的に検討することがありませんでした。

むろんこれまでも上町台地の歴史を物語る試みは、多くなされてきました。外来者を案内する歴史ボランティアも大勢養成されています。しかし、通過していく観光客と異なり、ここに暮らし、ここに生きる人たちがとって、歴史・伝統には観光資源である以上の価値が求められるものであり、そこにこそ都市が蓄積してきた長大な時間が現代に結ばれる普遍の発見があるのではないのでしょうか。都市の系譜あるいは記憶といったものに気づく時、私たちは身近な家族や地域といったコミュニティのありかたに改めて関心を払わずにはいられません。また、そういった普遍に共感する、新たな外来者(移住者、観光者、学習者、活動者など)を招き入れるものと思います。

このたびは、上町台地のひとつの歴史資源である下寺町を取り上げ、そこに生きる僧侶たちの生の声を通して、



「てらまち極楽ストーリー」第2話の会場となった一心寺・三千仏堂。建築家でもある、同寺の高口恭行長老が設計。地下に一心寺シアター「倶楽」がある



「てらまち極楽ストーリー」第3話の会場となった大覚寺。文化10年(1813)に再建された本堂は見事な建築彫刻を今に伝えている

都市と歴史のパススペクティブについて考えます。また、この貴重な歴史資源をどのように社会に開き、つないでいくのか、市民との積極的な議論を巻き起こしたいと思います。

歴史・文化の連続性に向き合う本質的な意味とは何であり、そこからいったい何が見えてくるのか。このイベントは、まさにその問いから生まれてきたものだということを、上記の趣旨文を通して、再確認することができる。

なかでも、同イベントの最終回・第4話における、加藤政洋氏の講演とトークセッションは、その問いの奥へと鋭く踏み込んでいく内容となった。印象的なフレーズの断片を紹介しながら、冒頭に設定した問いに対する答えを探ってみよう。

## ヘテロトピアが映し出すヴィジョン

加藤氏は、「下寺町の空間誌 素描」をプロローグに、近世には都市の周縁として空間的に位置付けられていた寺町が、近代の都市化によって周縁から都心周辺へと空間的位相の転換を経験した点に着目。なかでも、都市化を象徴する建造環境の一つとして、巨大な道路による景観・風景の切断を上げている。本来場と場を結びつけるメディアであった街路が、巨大な構築物としてまちを貫き、社会的断層・亀裂を生み出し、外部との交流の困難性をもたらしたという指摘である。

続いて、寺町から「コミュニティ再考 共同体から共移体」共異体へ」に視線を移し、今、都市を考える上で最も重要なファクターとして、近代・ポスト近代における日常的な移動性の強度と、移動の時代における場所のあり方に言及する。移動を前提とした社会では、さまざま

まな出自を持つ人々、そこで生まれ育ったことを前提としない地域社会が誕生しており、同質性から異他性へ、つまり共同体ではなくむしろ共移体「共異体としてのコミュニティ」が希求されているというわけである。その上で、社会的ネットワークの結節点としての、共移体「共異体」の場のあり方、開かれた場所感覚の必要性がクローズアップされていく。

下寺町の空間誌と、現代社会におけるコミュニティの再考を経て、加藤氏の論は「混在郷としての下寺町 社会を構想する街へ」と展開する。他者としての死者、無数の他者たちの痕跡で埋め尽くされた場が下寺町であること。耳を傾けること、想像することによってしか成立しない死者(他者)の人生を想像すること、死者とのコミュニケーションの可能性こそが、実は他者とのコミュニケーションの可能性を開き得ること。混在郷としての下寺町に一つの光を見出していくのである。他者に寄り添うこと、他者の置かれている空間的・社会的位置を想像すること、痛みや喜びの分有を可能にするのではないかと。

講演の最後に、加藤氏は、M・フーコーによる「ヘテロトピア」の概念を引用し、どれだけ夢見ても実現できない「ヘテロトピア」に対して、社会の中に必ず存在しながら通常の社会通念の通用しない空間の役割にふれた。社会の前提そのものを覆す空間としてのヘテロトピアが映し出す未来を、自己を映し出す「鏡」の世界に例えて、ヘテロトピアとしての下寺町の可能性の表出である。

他者に寄り添う想像力、自分を問い直す視点を与えてくれる場、現代社会を照射することのできる場へ。プラ



「てらまち極楽ストーリー」第4話の会場となった應典院。下寺町の北端に位置し、劇場型寺院として活動を展開している

ンされるまちではなく、社会構想するまちへの思いが、  
下寺町に像を結んでいった。

### 現代と関係を取り持つ歴史・伝統とは

寺町の外に身を置く者、他者としての加藤氏が下寺町に投げかけた鋭い眼差しに触発されて、トークセッションは、刺激的なキーワードが飛び交う場となった。

下寺町の寺院に生きる当事者であり、同イベントの企画者である秋田氏は、当事者が一人称で寺町を語る必要性に端を発し、「他者から見れば何で寺町なのか……」という違和感に向き合っていくことが企画の原点であると明かした。

そして、地域・社会と寺との関係が乏しい日本の現状を振り返り、今後日本社会が直面していく多死社会をは



江戸時代には大坂の周縁部に位置した寺町だが、近代以降の市街の拡張を経て、今都心を縦横に貫く道路に分断されながら姿を留めている（西代官山クラブ「上町台地をあそぼう！」マップから）

じめ、人々の心をめぐる深刻な課題に、寺は地域・社会の一セクターとしてどう向き合い、どのような役割を果たしていくべきか。欲望を掻き立てることで成り立つ社会に対して、喪失を基点に次の世代に何かを届けていくことができるのではないか。重要なのは、歴史の蓄積の量や古さではなく、関わりのあり方であり、そこに市民が参加・協働する仕組みをどうつくっていくかが課題なのだ。

渥美氏は、阪神・淡路大震災や中越大震災の被災地の支援活動経験から、他者に寄り添うことの意味を紐解いた。被災地の破壊された風景や生活に触れ、空間に時間が加わってはじめて場所が生まれるとすれば、仮に破壊された空間の復興はできたとしても、時間の復興はできるのかとの問題を提起。そこで他者の声に耳を傾けるという行為は、他者の生きられた時間をいかに回復するかという行為に他ならないと説き、こうした思いや行為

を誘発する場所が都心ではとりわけ減少している状況下での、寺町への期待を示した。

また、宋氏は、在日コリアンとして、複数のアイデンティティを持たざるを得ない、自身が置かれた立場から、歴史・伝統・文化というキーワードに対する率直な違和感を皮切りに、既存の伝統文化が批判され再構築されるプロセスから、新しい文化が生まれるという視点に立つて、現代の暮らしと関係を取り結べない歴史や伝統は市民・社会の関心を生み得ないと指摘。事態を前に進めていくためには、新しい風を外から入れる必要があり、ステレオタイプな境界をずらし、相互に乗り入れていくべきであると主張した。そして、きれいな話に終始してしまわないためにも、まずはマイノリティの声に対して応答責任を持つ誠実が求められるのではないかと付け加えた。

加藤氏もまた、三者の声を受けて、まちづくりにおける合意形成や対話のプロセスの中で、歴史的過程で消されたものの存在への想像力の必要性を改めて強調し、歴史的・地理的文脈から切り離し、リアルな時間につながっていない時間の商品化(断片的な空間化)への批判を加えた。

## 第二話の終わりに

最後に、コーディネーターの山口氏とコメンテーターとして登場した高田氏の一言を借りながら、筆者の雑感を加えて、第二話の締めくくりとしたい。

市民が主体的に関わるまちづくりやNPOの活動は、地域・社会が直面している緊急の課題に取り組むことからスタートすることが圧倒的に多い。危機感を動機とする活動展開である。となると、緊急の課題が顕在化しにくいまちでは、まちのあり様について市民が主体的に関

わる場が形成されにくい。徐々に地域の力が減退していく可能性も懸念される。NPOの実態に詳しい山口氏はこの点にふれ、まちづくりやNPOの活動は、従来の緊急度・重要度の高い領域から、むしろ今回のテーマでもある、歴史・文化との関わりをはじめ、日常の中で緊急度は低いながら、長い目で見た際に重要性を孕む課題にこそ、目を向けていくことが必要とされつつあると、川北秀人氏の説を引きながら問いかけた。日常の物語として「私たちの寺町」と語ることができるとはどうか、地域が失われるかどうかの岐路になるのではないかと。

住まい・まちづくりの研究者である高田氏は、まちの問題とはつまるところ異なる価値観の対立を乗り越えることであり、緊急課題を入り口とするまちづくりの多くが利害調整で挫折すると指摘。そして、実は歴史や文化こそ、そもそも矛盾の塊であり、矛盾の蓄積に気づくことこそ、まちづくりの現場で歴史・文化に向き合う大きな意味だと説く。

背景の異なる者同士が対話をしていかななくてはならない、まちづくりの究極の課題に向き合う方法を考えていくこと。それが、上町台地からまちを考える会の使命であるとした上で、主体間の境界となっているものは何であるかを考え、その境界を相対化し、組み替え、再編していく試みを積み重ねることによって、次の世代に受け渡すまちづくりを考えていくことが可能になるのだと結んだ。

寺町固有の歴史・文化に向き合うことから、他者の存在が引き出され、共移体<sup>1</sup>共異体としてのコミュニティのあり方、さらには境界を相対化し主体を再編する、まちづくりの普遍的な課題へ。徐々に視界が広がっていくダイナミズムは、確かにヘテロトピアとしての鏡に映るもう一つの世界にふれる実感を残した。

(大阪ガスエネルギー文化研究所 客員研究員)

CEL